

仏教研究における漢訳仏典の有用性

— 『雑阿含経』を中心に —

榎本文雄

序

仏教を研究するに際し、中国仏教を始めとした東アジア仏教の分野では、漢文仏典は一次資料となる。では、インド語<sup>1</sup>文献が一次資料となるインド仏教の研究に際して、漢訳仏典は如何なる有用性を有するのか。この点に関して考えられるものを列挙すると以下ようになる：

1 インド語原典もチベット訳なども現存しないテキストの場合、漢訳仏典は現存する唯一の version として不可欠な資料である。

2 インド語原典が現存するテキストでも、それと異なる version を提示する場合、現存するインド語テキストよりも古い version であることが多く、漢訳仏典は貴重である。

3 インド語原典が現存し、それと同じ version の場合でも、漢訳仏典はインド語原典の内容理解に資したり、インド語原典の校訂に有用である。

4 漢訳仏典の訳出に関する記録からそのテキストのインドにおける成立年代の下限などの重要な情報が得られる。

全漢訳仏典に亘り、これらの諸点に関して、実例や問題点、新たな研究の可能性まで検討するのが本来であるが、今回は、最初期の仏教経典である阿含経典の一つ、『雑阿含経』に限定して、以上の諸点を考察するにとどめたい。

1

仏典は内容に応じて、経・律・論に三分されるが、このうち経は、阿含経典、大乘仏教経典、密教経典に三分できる。この中で、ブッダ（ゴータマ・ブッダ、シャーキャ・ムニ、釈尊）の直説に最も近いもの、つまり最初期の仏教（所謂、原始仏教、ないし初期仏教）の思想を伝えるものが阿含経典である。因みに、阿含とはインド語の āgama の音写語であり、「伝承」を意味する。もっとも、最初期の仏教教団は後に分裂し、18前後の部派と呼ばれる教団の集合に至り、部派仏教、所謂「小乗仏教」時代に到ることとなる。したがって、現実には、これらの部派が各々の阿含経典を伝えたわけである。現在、全ての部派の阿含経典が現存しているわけではないが、残存

<sup>1</sup>正確には、インド・アーリヤ語（Indo-Aryan）

している阿含經典を複数の部派間で比較すると、一言で言えば大同小異という結果になる。つまり、本来ブッダやその直弟子の直説を伝えたものが、各部派内部で内容や言語に関してそれぞれ独自の発展を遂げたために、多少の相違を伴っているのが現存する阿含經典である。この部派が伝えた阿含經典としては、現在も主にスリランカや東南アジアで盛んな南方上座部のパーリ語經典が完本で伝わっている。しかし、諸部派の中でも、インド本国、特に北インドで最も重要な役割を果たし、さらに、チベット、中央アジア、中国から日本に至る漢字文化圏においても最も重要な影響を与えた部派は説一切有部である。そして、この説一切有部が伝えた四ないし五種類の阿含經典の中でしばしば筆頭に掲げられる<sup>2</sup>ものが Saṃyuktāgama (サンユクターガマ) であり、この漢訳が求那跋陀羅訳『雑阿含經』五十巻<sup>3</sup>なのである。

Saṃyuktāgama とは、文字通りは「結合された伝承」という意味であるが、求那跋陀羅訳『雑阿含經』から知られるように、実際は比較的長さの短い經 (sūtra) を内容に応じて分類し集成した經典である。内容としては、人間存在を構成する五部門 (五蘊)、六種の認識の拠り所 (六処)、苦しみに到る因果項目 (縁起)、諸修行項目などの最初期の仏教の基本教理の解説、さらにブッダと神々、魔、王、婆羅門、僧や尼僧などとの対話などである。このテキストには、インド語の完本は現存せず、インド語からチベット語など他言語に直接翻訳した完本も劉宋の求那跋陀羅訳『雑阿含經』五十巻以外は現存しない。その意味で、漢訳仏典の有用性の第 1 に掲げた「インド語原典もチベット訳なども現存しないテキストの場合、漢訳仏典は現存する唯一の version として不可欠な資料である」ものの一つに『雑阿含經』五十巻が相当する。

## 2

南方上座部のパーリ語經典の中に Saṃyutta-Nikāya (サンユッタ・ニカーヤ) がある。名称から知られるように、これは Saṃyuktāgama に対応するものであり、内部の組織や内容も互いに共通点が多い。ここで、version という語を広く捉えれば、本来、比較的長さの短い經 (sūtra, sutta) を内容に応じて分類し集成した經典があり、その説一切有部 version が Saṃyuktāgama であり、その南方上座部 version が Saṃyutta-Nikāya であるとも言える。その意味では、漢訳仏典の有用性の第 2 に掲げた「インド語原典が現存するテキストでも、それと異なる version を提示する場合、現存するインド語テキストよりも古い version であることが多く、漢訳仏典は貴重である」ものの一つに『雑阿含經』五十巻が相当するとも考えられなくもない<sup>4</sup>。ただ、Saṃyuktāgama と Saṃyutta-Nikāya とは、一方が他方の新 version や旧 version という訳ではなく、両者に共通する原伝承から発展した二方向の version という事となる。したがって、両者を比較することで、両者に共

<sup>2</sup>水野弘元「漢訳の『中阿含經』と『増一阿含經』」『佛教研究』18 (1989), p.34 参照。

<sup>3</sup>『大正藏』2, pp.1ff.

<sup>4</sup>このように version という語の捉え方の如何では、この漢訳仏典の有用性の 1 と 2 とは峻別し難くなる。

通する部分や相違する部分が見分けられ、一方では両者に共通する原伝承が推測され、他方では両 version において各々独自に伝承を発展させた部分が推定される。

さらに、Saṃyutta-Nikāya にしろ、『雑阿含経』五十巻にしろ、これらは短い sutta や経の集成であるから、この一つ一つの短経というミクロの観点で捉えると、各短経に応じて、有用性の 1 「インド語原典もチベット訳なども現存しないテキストの場合、漢訳仏典は現存する唯一の version として不可欠な資料である」に相当するものと、2 「インド語原典が現存するテキストでも、それと異なる version を提示する場合、現存するインド語テキストよりも古い version であることが多く、漢訳仏典は貴重である」に相当するもの、さらに後で述べるように、3 「インド語原典が現存し、それと同じ version の場合でも、漢訳仏典はインド語原典の内容理解に資したり、インド語原典の校訂に有用である」に相当するものに分かれることとなる<sup>5</sup>。

また、『雑阿含経』には、求那跋陀羅訳『雑阿含経』五十巻以外に、失訳の『別訳雑阿含経』十六巻<sup>6</sup>、同じく失訳ではあるが後漢の安世高訳と推論されている<sup>7</sup>『雑阿含経』一卷<sup>8</sup>がある。これらは、Saṃyutta-Nikāya に比べて、求那跋陀羅訳『雑阿含経』五十巻に遥かに近い関係にあるが、相違もあるので<sup>9</sup>、別の 2 versions として貴重である。

しかも、Saṃyuktāgama は他の仏典にしばしば引用される。例えば、4 世紀後半<sup>10</sup>に僧伽跋澄がインド語原本を将来した『尊婆須蜜菩薩所集論』という説一切有部もしくはそれに近い部派の文献があり、この文献には様々な経典が引用されているが、その中の『雑阿含経』と対応する箇所を細かく比較すると、『尊婆須蜜菩薩所集論』が引用するものの方が『雑阿含経』より古い読みを保持している箇所が見つかる<sup>11</sup>。このようにして、説一切有部、もしくはそれに近い部派が保持した Saṃyuktāgama の諸 version を垣間見

<sup>5</sup>このように、全体か部分かの観点の違いには常に留意する必要があるだろう。例えば、筆者は以前、『法句譬喻経』(『大正蔵』4, pp.575ff.)を調べたことがあり、その際に『法句譬喻経』の散文部分は、『法句経』(『大正蔵』4, pp.559ff.)から選び出した各偈の因縁譚として相応しいと漢訳者が判断したインド起源の物語や、中国で創作された可能性のある物語を適宜組み合わせた、一種の編集文献であり、インド起源の物語の訳出に際しては既存の漢訳仏典の訳文を一部で転用したり、別々の物語やモチーフを無理に接合している場合もあると推論した(榎本文雄「『法句譬喻経』覚え書き」榎本文雄他共著『真理の偈と物語・「法句譬喻経」現代語訳』下巻、大蔵出版社、2001、pp.275-282。)。これらの場合、全体としての編集は中国人が行ったと言えるが、編集以前の素材そのものでインド起源とみなせるものはインド仏教研究の資料となりうる。

<sup>6</sup>『大正蔵』2, pp.374ff.

<sup>7</sup>Harrison 2002.

<sup>8</sup>『大正蔵』2, pp.493ff.

<sup>9</sup>See 榎本文雄「阿含経典の成立」『東洋学術研究』23 巻 1 号 (1984), pp.101f.; Harrison 2002.

<sup>10</sup>僧伽跋澄が長安にきた年代は、『出三蔵記集』の「僧伽跋澄伝」では正確な年代を与えないが、『高僧伝』では 381 年(『大正蔵』50, p.328b) 僧叡の「出曜経序」(『大正蔵』4, p.609c)と『出三蔵記集』に引用される道安の「鞞婆沙序」(『大正蔵』55, p.73c)では 383 年、同じく『出三蔵記集』に引用される「婆須蜜集序」(『大正蔵』55, p.71c)では 384 年と一定しない。

<sup>11</sup>榎本文雄「説一切有部系アーガマの展開」『印度学佛教学研究』32 巻 2 号 (1984), pp.1070-1073; 「『尊婆須蜜菩薩所集論』所引の阿含の偈をめぐって」『渡邊文磨博士追悼記念論集』永田文昌堂、1993, pp.255-269.

ることができる。

3

次いで、漢訳仏典の有用性の3の「インド語原典が現存し、それと同じ version の場合でも、漢訳仏典はインド語原典の内容理解に資したり、インド語原典の校訂に有用である」という点でも、『雑阿含経』は該当する場合がある。

先に述べたように、『雑阿含経』のインド語原本の Saṃyuktāgama の完本は現存していない。しかし、説一切有部の Saṃyuktāgama の写本断片や諸インド語テキストへの引用箇所は次々に発見されている。それは、漢訳で伝わる『雑阿含経』が説一切有部の Saṃyuktāgama の翻訳であるため、これとの比較によって、極く微細な写本断片であっても、その正体が Saṃyuktāgama であることが比較的容易に知られるからである。私は以前に Saṃyuktāgama の最後の章であり、全体の約5分の1を占める \*Saṃgītanipāta の部分の写本断片や諸インド語テキストへの引用を収集し、『雑阿含経』と対照させたものを作成したことがある<sup>12</sup>。この対照表を検討していると、インド語とそれに対応する『雑阿含経』の訳文の間で齟齬が見られることがしばしばある。そもそも両者の原典が違っていると推定される場合や、『雑阿含経』の側での誤訳と看做される場合が多いが、中にはその齟齬がインド語原典の内容理解に資する場合もある。ここでは、その一例として『雑阿含経』1078 経の中の訳例を挙げてみたい。この経の主要部分に相当するものが Yogācārabhūmi の Śarīrārthagāthā<sup>13</sup> に引用されており、そこに以下の対応が見出される<sup>14</sup>。

<sup>12</sup>F. Enomoto, *A Comprehensive Study of the Chinese Saṃyuktāgama: Indic Texts Corresponding to the Chinese Saṃmyuktāgama as Found in the Sarvāstivāda-Mūlasarvāstivāda Literature*, Part 1: \*Saṃgītanipāta, Kyoto 1994 (文部省科学研究費報告書); “Sanskrit Fragments from the \*Saṃgītanipāta of the Saṃyuktāgama,” in: P. Kieffer-Pülz and J.-U. Hartmann (eds.), *Bauddhavidyāsudhākaraḥ: Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of His 65th Birthday* (Indica et Tibetica, 30), Swisttal-Odendorf (Germany) 1997, pp.90–106.

<sup>13</sup>Śag.

<sup>14</sup>引用文全体とそれに対応する『雑阿含経』1078 経の文は次の通りである。

ākhyeyasaṃjñīnaḥ sattvā      ākhyeye ’smin pratiṣṭhitāḥ |  
ākhyeyam aparijñāya      yogam āyānti mṛtyunaḥ || (1)  
ākhyeyaṃ tu pariññāya      ākhyātāraṃ na manyate |  
tad vai na vidyate tasya      vadeyur yena taṃ pare || (2)  
samo viśeṣa uta vāpi hīno      yo manyate sa vivadeta tena |  
vidhātraye ’smin na vikampate yaḥ      samo viśiṣṭas ca na tasya bhavati || (3)  
ācchidya tṛṣṇām iha nāmarūpe      prahāya mānaṃ ca na saṅgam eti |  
taṃ śāntadhūmam anighaṃ nirāsaṃ      nādrākṣus te devamanuṣyaloke |  
iha bāhirataś ca || (4)

衆生隨愛想	以愛想而住
以不知愛故	則爲死方便
若知所愛者	不於彼生愛
彼此無所有	他人莫能說
見等勝劣者	則有言論生
三事不傾動	則無軟中上
斷愛及名色	除慢無所繫
寂滅息瞋恚	離結絕悵望
不見於人天	此世及他世

寂滅息瞋恚 離結絕希望：『雜阿含經』<sup>15</sup>

tam śāntadhūmam anighaṃ nirāsaṃ : Śag<sup>16</sup>

煙がおさまっていて、悪しきことなく、欲望もないその（人）を

注目すべきは、śāntadhūmam に当る箇所が「寂滅息瞋恚」と訳されている点である。ここは dhūma（煙）が「瞋恚（怒り）」に相当することが問題であり、一見すると、この相違は、両者の原文が異なっていたためとか、誤訳のためとか看做されるかもしれない。しかし、『雜阿含經』1184 經に「瞋恚黒煙起（怒りの黒煙が起こる）」<sup>17</sup>とあり、対応するパーリ語經典で kodho dhūmo<sup>18</sup> 「怒りが煙である」とある。さらに krodha「怒り」のメタファーとして dhūma「煙」が用いられることは、他の仏教文献やジャイナ教文献にもしばしば見られることが指摘されている<sup>19</sup>。これらの事実から、『雜阿含經』1078 經の原典にも Yogācārabhūmi 同様 dhūma とあり、それが「瞋恚」と訳されたのは、以上のような「怒り」のメタファーとしての「煙」という、『雜阿含經』はじめ仏教文献によく見られる教説に従った意訳と考えられる。その意味で、『雜阿含經』のこの「瞋恚」という訳語はインド語原典の内容理解に資するものである。

次に、漢訳仏典の有用性の3の「インド語原典が現存し、それと同じ version の場合でも、漢訳仏典はインド語原典の内容理解に資したり、インド語原典の校訂に有用である」の後半部の「漢訳仏典は…インド語原典の校訂に有用である」という点について検討してみたい。先に、Saṃyuktāgama 全体の約5分の1を占める \*Saṃgītanipāta に関するインド語テキストと『雜阿含經』の対照表に触れたが、いずれ『雜阿含經』全体に亘ってこのような対照テキストを作成したいと私は念願している。ただ、そのためには、まず、判明している限りの説一切有部の Saṃyuktāgama の写本断片を校訂出版する必要がある。

ここでは、その一例として、所謂ヘルンレ写本に含まれるサンスクリット断片の中で、筆者が同定したものの、未だテキストを公表していないもの2点<sup>20</sup>を取り上げる。まず、極く小さな断片の Photo 155, 183<sup>21</sup>から検討する。この写本断片の書体は北トルキスタンプラーフミーの a 型<sup>22</sup>で、出土

<sup>15</sup> 『大正蔵』2, p.282a。

<sup>16</sup> Śag 2.4.

<sup>17</sup> 『大正蔵』2, p.321a。

<sup>18</sup> SN, Vol.1, p.169.

<sup>19</sup> 谷川泰教「vidhūma と vyaṅgāra」『高木神元博士古稀記念論集・仏教文化の諸相』、山喜房佛書林、2000、pp.181–202 (esp. 194–196)。

<sup>20</sup> 以下、いずれも、最初のローマ字転写はドイツのゲッティンゲン大学所蔵のマイクロフィルムを基にして Jens-Uwe Hartmann 教授と Klaus Wille 博士によりなされた。筆者はそれを東洋文庫所蔵のマイクロフィルムと諸パラレルテキストを基に若干修正した。マイクロフィルム利用に際しては松田和信教授に便宜を被った。写本のローマ字転写方式は SHT に準じるが、= の記号は使用しない。

<sup>21</sup> Hartmann and Wille 1992, p.33.

<sup>22</sup> L. Sander, *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung* (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 8), Wiesbaden 1968, p.182.

地は不明である。まず、断片自身のローマ字転写を提示する。

recto<sup>23</sup>

- 1 /// danā aduḥkhāsu + + ///
- 2 /// + duḥkha[t]o dṛ[ṣt]ā bha[va] ///
- 3 /// + to drākṣīd duḥkhaṃ paśya ///
- 4 /// + || tisro vedanāḥ [s]. ///
- 5 /// ++ pratighānuśay. ///
- 6 /// + + .. + .āyā .. ///

verso

- 1 /// + + .. + + + + ///
- 2 /// + nuśayo bha .. + ///
- 3 /// + [de]śitam\* tad api + ///
- 4 /// + dṛṣṭe dharme nirāśra ///
- 5 /// tālaṃ mahān eṣa .r. ///
- 6 /// m adhivacanaṃ yad u + ///

これは極めて微細な断片であるが、調査の結果、以下のように、『雑阿含経』の巻 17 の 467-469 経<sup>24</sup>に相当することが判明する。太字で対応部分を表示し、右に写本断片の行数を記す。

(四六七) 如是我聞。一時佛住王舍城迦蘭陀竹園。爾時尊者羅睺羅往詣佛所、稽首禮足、退坐一面、白佛言。世尊、云何知云何見、我此識身及外境界一切相、得無有我我所見我慢繫著使。佛告羅睺羅。有三受。苦受、樂受、不苦不樂受。觀於樂受而作 r1 苦想、觀於苦受作劔刺想、觀不苦不樂受作無常想。若彼比丘觀於樂受而作苦想、 r2 觀於苦受作劔刺想、觀不苦不樂受作無常滅想者、是名正見。爾時世尊即說偈言

觀樂作苦想	苦受同劔刺 r3
於不苦不樂	修無常滅想
是則爲比丘	正見成就者
寂滅安樂道	住於最後邊
永離諸煩惱	摧伏衆魔軍

佛說此經已、尊者羅睺羅聞佛所說、歡喜奉行

(四六八) 如是我聞。一時佛住王舍城迦蘭陀竹園。爾時尊者羅睺羅往詣佛所、稽首禮足、

<sup>23</sup>写本自身からは、これが recto だとはわからないが、後で示す『雑阿含経』との対比からそれは知られる。

<sup>24</sup>『大正蔵』2, p.119a-c

退坐一面、白佛言。世尊、云何知云何見、我  
此識身及外境界一切相、得無有我我所見  
我慢繫著使。佛告羅睺羅。有三受。苦受、樂 r4  
受、不苦不樂受。觀於樂受爲斷樂受貪使  
故、於我所修梵行、斷苦受瞋恚使故、於我 r5  
所修梵行、斷不苦不樂受癡使故、於我所  
修梵行。羅睺羅、若比丘樂受貪使已斷已  
知、苦受恚使已斷已知、不苦不樂受癡使已  
斷已知者、是名比丘斷除愛欲縛、去諸結、  
慢無間等、究竟苦邊。爾時世尊即說偈言

樂受所受時	則不知樂受
貪使之所使	不見出要道 v2
苦受所受時	則不知苦受
瞋恚使所使	不見出要道
不苦不樂受	正覺之所說 v3
不善觀察者	終不度彼岸
比丘勤精進	正知不動轉
如此一切受	慧者能覺知
覺知諸受者	現法盡諸漏 v4
明智者命終	不墮於衆數
衆數既已斷	永處般涅槃

佛說此經已、尊者羅睺羅聞佛所說、歡喜  
奉行

(四六九) 如是我聞。一時佛住王舍城迦蘭陀  
竹園。爾時世尊告諸比丘。大海深嶮者、此  
世間愚夫所說深嶮、非賢聖法律所說深嶮。 v5  
世間所說者、是大水積聚數耳。若從身生諸 v5  
受、衆苦逼迫、或惱或死、是名大海極深嶮 v6  
處。愚癡無聞凡夫於此身生諸受、苦痛逼  
迫、或惱或死、憂悲稱怨、啼哭號呼、心亂發  
狂、長淪沒溺、無止息處。多聞聖弟子於身  
生諸受、苦痛逼迫、或惱或死、不生憂悲  
啼哭號呼心生狂亂、不淪生死、得止息處。  
爾時世尊即說偈言

身生諸苦受	逼迫乃至死
憂悲不息忍	號呼發狂亂
心自生障礙	招集衆苦增
永淪生死海	莫知休息處
能捨身諸受	身所生苦惱
切迫乃至死	不起憂悲想
不啼哭號呼	能自忍衆苦
心不生障礙	招集衆苦增
不淪沒生死	永得安隱處

佛説此經已、諸比丘聞佛所説、歡喜奉行

対応する南方上座部のパーリ語經典 Saṃyutta-Nikāya 36.3–5<sup>25</sup>は以下の通りである。太字で対応部分を表示し、右に写本断片の行数を記す。

3 (3) pahānena

3 **tisso imā bhikkhave vedanā** // katamā tisso // // **sukhā** r4

vedanā dukkhā vedanā adukkhamasukhā vedanā // //

4 sukhāya bhikkhave vedanāya rāgānusayo pahātabbo //

dukkhāya vedanāya paṭighānusayo pahātabbo // adukkham

asukhāya vedanāya avijjānusayo pahātabbo // //

5 yato kho bhikkhave bhikkhuno sukhāya vedanāya

rāgānusayo pahīno hoti // dukkhāya vedanāya **paṭighānusayo** r5

pahīno hoti // adukkhamasukhāya vedanāya avijjānusayo

pahīno hoti // ayaṃ vuccati bhikkhave bhikkhuno

pahīnarāgānusayo sammaddaso acchejji taṇhaṃ // vivattayi

saṃyojanaṃ // sammāmānābhisamayā antam akāsi

dukkhassā ti //

6 sukhaṃ vediyamānassa vedanam appajānato //

so **rāgānusayo hoti** anissaraṇadassino //1 // v2

dukkhaṃ vediyamānassa vedanam appajānato //

paṭighānusayo hoti anissaraṇadassino //2 //

adukkhamasukhaṃ santam bhūripañña **desitaṃ** // v3

**taṃ cāpi** abhinandati n' eva dukkhā pamuccati //3 // v3

yato ca kho bhikkhu ātāpī sampajaññaṃ na riñcati //

tato so vedanā sabbā pariṇānāti paṇḍito //4 //

so vedanā pariññāya **diṭṭhe dhamme anāsavo** // v4

kāyassa bheda dhammaṭṭho saṅkhaṃ nopeti vedagū ti //5 //

4 (4) pātāla

3 assutavā bhikkhave puthujjano yaṃ vācam bhāsati

atthi mahāsamudde pātālo ti // taṃ kho pan' etam bhikkhave

assutavā puthujjano asantam asaṃvijjamānam evaṃ

vācam bhāsati atthi mahāsamudde **pātālo** ti // // v5

4 sārīrikānaṃ kho etam bhikkhave dukkhānaṃ vedanānaṃ

**adhivacanaṃ yad idam** pātālo ti // // v6

5 assutavā bhikkhave puthujjano sārīrikāya dukkhāya

vedanāya phuṭṭho samāno socati kilamati paridevati urattālikandati

sammoham āpajjati // ayaṃ vuccati bhikkhave

assutavā puthujjano pātāle na paccuṭṭhāsi gādhañ ca n' ajjhagā //

6 sutavā ca kho bhikkhave ariyasāvako sārīrikāya dukkhāya

vedanāya phuṭṭho samāno na socati na kilamati

na paridevati na urattālikandati na sammoham āpajjati //

<sup>25</sup>SN, Vol.4, pp.205,7–207,22

ayaṃ vuccati bhikkhave sutavā ariyasāvako pātāle paccuṭṭhāsi  
gādhañ ca ajjhagāti // //

yo etā nādhivāseti      uppannā vedanā dukkhā //  
sārīrikā paṇaharā      yāhi puṭṭho pavedhati //  
akkandati parodati      dubbalo appathāmako //  
na so pātāle paccuṭṭhāsi      atho gādham pi n' ajjhagā //1  
yo ce tā adhivāseti      uppannā vedanā dukkhā //  
sārīrikā paṇaharā      yāhi puṭṭho na vedhati //  
sa ce pātāle paccuṭṭhāsi      atho gādham pi ajjhagā ti //  
5 daṭṭhabbena

3 tisso imā bhikkhave vedanā // katamā tisso // // sukhā  
vedanā dukkhā **vedanā adukkhamasukhā** vedanā // // sukhā r1  
bhikkhave vedanā dukkhato daṭṭhabbā // dukkhā vedanā  
sallato daṭṭhabbā // adukkhamasukhā vedanā aniccato daṭṭhabbā // //  
4 yato kho bhikkhave bhikkhuno sukhā vedanā **dukkhato diṭṭhā hoti**<sup>26</sup> //  
r2  
dukkhā vedanā sallato diṭṭhā hoti // adukkhamasukhā  
vedanā aniccato diṭṭhā hoti // ayaṃ vuccati  
bhikkhave bhikkhu sammaddaso acchejji taṇham vivattayi  
saṃyojanaṃ sammamānābhisaṃmayā antam akāsi  
dukkhassā ti // //

yo sukhaṃ dukkhato **adda**      **dukkham adakkhi** sallato //r3  
adukkhamasukhaṃ santam      adakkhi nam aniccato // //  
sa ve sammaddaso bhikkhu      parijānāti vedanā //  
so vedanā pariññāya      diṭṭhadhamme anāsavo //  
kāyassa bhedaṃ dhammaṭṭho      saṅkhaṃ n' upeti vedagū ti // //

このようにして、『雑阿含経』467–469 経やパーリ語經典に対応することが判明し、それらと比較することで、この写本断片は以下のように一部が復元できる。

recto

- 1 /// danā<sup>(1)</sup> aduḥkhāsu(kha) + /// ... 感受、不苦不楽 ...
- 2 /// + duḥkha[t]o dr[st]ā bha[va]<sup>(2)</sup> /// ... 苦しみだと見られた ...
- 3 /// + to<sup>(3)</sup> drākṣīd duḥkhaṃ paśya<sup>(4)</sup> /// ... 苦しみだと見、苦しみを  
... 見る ...
- 4 /// + || tisso vedanāḥ [s].<sup>(5)</sup> /// ... 3 感受とは、楽 ...
- 5 /// + + pratighānuśay. /// ... 敵意という煩惱 ...
- 6 /// + + .. + .āyā .. /// ...

verso

- 1 /// + + .. + + + + /// ...
- 2 /// (a)nuśayo bha(vati) /// ... 煩惱が生じる ...

<sup>26</sup>底本は honti だが、タイ・ミャンマー版により訂正

- 3 /// + [de]śitam\* tad api + /// ... 示された。それもまた ...  
 4 /// + dṛṣṭe dharme nirāśra<sup>(6)</sup> /// ... 現世において（煩惱や業が）漏れこむことなく ...  
 5 /// tālaṃ<sup>(7)</sup> mahān eṣa .r. /// ... 落下所。この大きな ...  
 6 /// m adhvacaṇaṃ yad u(ta) /// ... のことを言う、すなわち ...

- (1) *Read vedanā.*  
 (2) *Read bhavati.*  
 (3) *Read duḥkhato.*  
 (4) *Read paśyati.*  
 (5) *Read sukha.*  
 (6) *Read nirāśrava.*  
 (7) *Read pātālaṃ.*

以上、極く微細な写本断片であるが、『雑阿含経』と比較することで、写本の正体が Saṃyuktāgama であることが知られると同時に、また Saṃyuktāgama 全体の中でこの写本が占める位置も知られる。

次いで、もう少し大きな断片 Photo 172: h<sup>27</sup>を取り上げる。書体は北トルキスタンプラーフミーの a 型で、出土地は不明である。

まず、断片自身のローマ字転写を提示する。

recto<sup>28</sup>

- 1 /// + jñānānātvaṃ pratītya sparśanānātvaṃ bhavati + + ///  
 2 /// vati saṃjñānānātvaṃ pratītya chandanānātvaṃ bha + ///  
 3 /// [tva]ṃ pratītya paryeṣanānānātvaṃ bhavati | kiṃ ca dh. ///  
 4 /// .. [tva]ṃ pratītya saṃjñānānātvaṃ bhavati saṃjñānānā ///  
 5 /// .. ridāghanānātvaṃ pratītya paryeṣanānānā ///  
 6 /// [tp]adyate cakṣuḥsaṃsparśaḥ pūrvasūtravad [vacya] ///

verso

- 1 /// te manaśchandaḥ na manaśchandaṃ pratītyotpadyate ///  
 2 /// [pra]tītyotpadyate manaḥparidāghaḥ na manaḥ[p]. ///  
 3 /// .. [pra]tītyotpadyate manaḥparyeṣanā | na ma ///  
 4 /// tunānātvaṃ pratītya sparśanānātvaṃ bhavati s. ///  
 5 /// vati saṃkalpanānātvaṃ pratītya paridāgha + ///  
 6 /// [ghaḥ]nānātvaṃ bhavati na paridāghanān. + + ///

調査の結果、この写本断片は、以下の『雑阿含経』巻 17 の 455 経<sup>29</sup>に比較的好く一致することがわかる。この『雑阿含経』455 経は、『大正蔵』の

<sup>27</sup>Hartmann and Wille 1992, p.38. なお、そこで、これが『雑阿含経』の巻 16, 17 の 454-455 (『大正蔵経』2, pp.116bc, p.125a) の両経に当たるといふ私の同定が示されている。確かに、454 経に当る部分も含まれるが、厳密に言うと、以下に示すように 455 経の対応断片とすべであり、そのように訂正したい。

<sup>28</sup>写本自身からは、これが recto だとはわからないが、後で示す『雑阿含経』との対比からそれは知られる。

<sup>29</sup>『大正蔵』2, p.125a. Cf. SHT 6, 1393; SN, Vol.2, pp.143-149.

底本とされている高麗版には含まれておらず、『大正蔵』は宋・元・明の三本に基づいている。まず、『雑阿含経』455 経を『大正蔵』のままに提示する。

(四五五) 如是我聞。一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園。爾時世尊告諸比丘。緣界種種故。生種種觸。緣種種觸生種種想。緣種種想。生種種欲。緣種種欲。生種種覺。緣種種覺。生種種熱。緣種種熱。生種種求。云何種種界。謂十八界。眼界乃至法界。云何緣種種界。生種種觸。云何乃至緣種種熱。生種種求。謂緣眼界生眼觸。非緣眼觸生眼界。但緣眼界生眼觸。緣<sup>30</sup>眼觸生眼想。非緣眼想生眼觸。但緣眼觸生眼想。緣眼想。生眼欲。非緣眼欲生眼想。但緣眼想生眼欲。緣眼欲生眼覺。非緣眼覺生眼欲。但緣眼欲生眼覺。緣眼覺生眼熱。非緣眼熱生眼覺。但緣眼覺生眼熱。緣眼熱生眼求。非緣眼求生眼熱。但緣眼熱生眼求。如是耳鼻舌身意界緣生意觸。乃至緣意熱生意求。亦如是廣說。是名比丘緣種種界生種種觸。乃至緣種種熱。生種種求。非緣種種求生種種熱。乃至非緣種種觸生種種界。但緣種種界。生種種觸。乃至緣種種熱。生種種求。佛說此經已。諸比丘聞佛所說。歡喜奉行如內六入處外六入處亦如是說

この写本が断片である上に、『雑阿含経』の方も繰り返しの部分に省略が多いので、このままでは正確に対応させることができない。そこで、まず、『雑阿含経』において、「乃至」や「如是廣說」で繰り返し部分を省略している箇所を( )内に復元してみる。すると、この断片は以下のように、recto 2 以下は 455 経に一致することがわかる。太字で対応部分を表示し、右に写本断片の行数を記す。

(四五五') 如是我聞。一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園。爾時世尊告諸比丘。  
緣界種種故生種種觸、  
緣種種觸生種種想、 r2  
緣種種想生種種欲、 r2  
緣種種欲生種種覺、  
緣種種覺生種種熱、  
緣種種熱生種種求。云何種種界。 r3

<sup>30</sup> 『中華大藏経』32, 北京, 1987 によって、『大正蔵』の「非緣」を「緣」に改める。なお、『中華大藏経』のこの部分は、金蔵廣勝寺本の影印である。

謂十八界。眼界乃至法界。  
云何緣種種界生種種觸。  
云何（緣種種觸生種種想、r4  
云何緣種種想生種種欲、r4  
云何緣種種欲生種種覺、  
云何緣種種覺生種種熱、  
云何）緣種種熱生種種求。r5  
謂緣眼界生眼觸、非緣眼觸生眼界、但緣眼界生眼觸。r6  
緣眼觸生眼想、非緣眼想生眼觸、但緣眼觸生眼想。  
緣眼想生眼欲、非緣眼欲生眼想、但緣眼想生眼欲。  
緣眼欲生眼覺、非緣眼覺生眼欲、但緣眼欲生眼覺。  
緣眼覺生眼熱、非緣眼熱生眼覺、但緣眼覺生眼熱。  
緣眼熱生眼求、非緣眼求生眼熱、但緣眼熱生眼求。  
如是耳鼻舌身。  
眼界緣生意觸、（非緣意觸生意界、但緣眼界生意觸。  
緣意觸生意想、非緣意想生意觸、但緣意觸生意想。  
緣意想生意欲、非緣意欲生意想、但緣意想生意欲。v1  
緣意欲生意覺、非緣意覺生意欲、但緣意欲生意覺。  
緣意覺生意熱、非緣意熱生意覺、但緣意覺生意熱。）v2  
緣意熱生意求、（非緣意求生意熱、但緣意熱生意求。）v3  
是名比丘、  
緣種種界生種種觸、v4  
（緣種種觸生種種想、v4  
緣種種想生種種欲、  
緣種種欲生種種覺、v5  
緣種種覺生種種熱、）v5  
緣種種熱生種種求。  
非緣種種求生種種熱、v6  
（非緣種種熱生種種覺、v6  
非緣種種覺生種種欲、  
非緣種種欲生種種想、  
非緣種種想生種種觸、）  
非緣種種觸生種種界。  
但緣種種界生種種觸、  
（緣種種觸生種種想、  
緣種種想生種種欲、  
緣種種欲生種種覺、  
緣種種覺生種種熱、）  
緣種種熱生種種求。  
佛說此經已、諸比丘聞佛所說歡喜奉行。  
如內六入處、外六入處亦如是說。

ここで、recto 1 の部分に対応がないことが問題となる。recto 2 は 455 経の最初の部分に対応するので、recto 1 は 455 経でなく、その前の 454 経に当たるとも考えられるが、現実には 454 経の末尾には対応箇所は見出されない。

ところで、この 455 経の 2 経前に 453 経があり、この経も 455 経とよく似た構造を持つ経であるが、この 453 経に対応する経文がシャマタデーヴァの *Abhidharmakośaṭīkā-Upāyikā* のチベット訳<sup>31</sup>に引用されている<sup>32</sup>。その冒頭部分<sup>33</sup>を取り出してみる。

glen gzi ni mñan du yod pa na 'o // dge sloñ dag sred pa sna tshogs  
la brten nas tshor ba sna tshogs 'byuñ ba ni ma yin zñ / tshor ba  
sna tshogs la brten te reg pa sna tshogs 'byuñ ba ni ma yin la /  
reg pa sna tshogs la brten nas khams sna tshogs 'byuñ ba (161b1)  
ni ma yin gyi / 'on kyan khams sna tshogs la brten nas reg pa sna tshogs  
par 'byuñ bar 'gyur zñ / reg pa sna tshogs la brten nas tshor ba sna tshogs /  
tshor ba sna tshogs la brten nas sred pa sna tshogs 'byuñ bar 'gyur ro // ...

一方、対応する『雑阿含経』453 経<sup>34</sup>は以下のようにある。

(四五三) 如是我聞。一時佛住舍衛國斯樹給  
孤獨園。爾時世尊告諸比丘。緣種種界生  
種種觸、緣種種觸生種種受、緣種種受生  
種種愛。云何種種界。謂十八界。眼界、色界、眼  
識界、乃至意界法界意識界。是名種種界。云  
何緣種種界生種種觸、緣種種觸生種種  
受、緣種種受生種種愛。謂緣眼界生眼  
觸、非緣眼觸生眼界、但緣眼界生眼觸。  
緣眼觸生眼受、非緣眼受生眼觸、但緣  
眼觸生眼受。緣眼受生眼愛、非緣眼愛  
生眼受、但緣眼受生眼愛。如是耳鼻舌身  
意界緣生意觸、非緣意觸生意界、但緣意  
界生意觸。緣意觸生意受、非緣意受生  
意觸、但緣意觸生意受。緣意受生意愛、  
非緣意愛生意受、但緣意受生意愛。是  
故比丘、非緣種種愛生種種受、非緣種  
種受生種種觸、非緣種種觸生種種界。但  
緣種種界生種種觸、緣種種觸生種種  
受、緣種種受生種種愛。是名比丘、當善  
分別種種界。佛說是經已、諸比丘聞佛所  
說、歡喜奉行

<sup>31</sup>大谷目録 5595; 東北目録 4094。

<sup>32</sup>本庄良文「シャマタデーヴァの伝える阿含資料—世品 (6) [51]~[75]—」『佛教研究』21 (1992), pp.87f. 参照。

<sup>33</sup>Derge, Tanjur, Mñon pa, Ju 161a7-.

<sup>34</sup>『大正蔵』2, p.116a.

両者を比較すると、チベット文のイタリック部分と『雑阿含經』453 經の下線部が対応するものの、チベット文でその直前にある太字部分が『雑阿含經』453 經には対応しない。他方、この部分は『雑阿含經』453 經では後半部分の太字箇所に見れる。この点で、『雑阿含經』453 經は、シャマタデーヴァの引用する經文と少し構成を異にすることがわかる。

同じような相違が、この『雑阿含經』455 經とサンスクリット断片との間にも起こっている可能性が考えられる。そこで、『雑阿含經』455 經における世尊の教説の冒頭に後半部の「非」で始まる 6 文を(( ))で囲って附加してみる。すると、以下のように、recto 1 の部分も対応させることができる。

(四五五”) 如是我聞。一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園。爾時世尊告諸比丘。

(( 非緣種種求生種種熱、  
非緣種種熱生種種覺、  
非緣種種覺生種種欲、  
非緣種種欲生種種想、  
非緣種種想生種種觸、 r1  
非緣種種觸生種種界。))

緣界種種故生種種觸、  
緣種種觸生種種想、 r2  
緣種種想生種種欲、 r2  
緣種種欲生種種覺、  
緣種種覺生種種熱、  
緣種種熱生種種求。云何種種界。 r3

謂十八界。眼界乃至法界。

云何緣種種界生種種觸。

云何 ( 緣種種觸生種種想、 r4

云何緣種種想生種種欲、 r4

云何緣種種欲生種種覺、

云何緣種種覺生種種熱、 )

云何 ) 緣種種熱生種種求。 r5

謂緣眼界生眼觸、非緣眼觸生眼界、但緣眼界生眼觸。 r6

緣眼觸生眼想、非緣眼想生眼觸、但緣眼觸生眼想。

緣眼想生眼欲、非緣眼欲生眼想、但緣眼想生眼欲。

緣眼欲生眼覺、非緣眼覺生眼欲、但緣眼欲生眼覺。

緣眼覺生眼熱、非緣眼熱生眼覺、但緣眼覺生眼熱。

緣眼熱生眼求、非緣眼求生眼熱、但緣眼熱生眼求。

如是耳鼻舌身。

意界緣生意觸、( 非緣意觸生意界、但緣意界生意觸。

緣意觸生意想、非緣意想生意觸、但緣意觸生意想。

緣意想生意欲、非緣意欲生意想、但緣意想生意欲。 v1

緣意欲生意覺、非緣意覺生意欲、但緣意欲生意覺。

緣意覺生意熱、非緣意熱生意覺、但緣意覺生意熱。 ) v2

縁意熱生意求、(非縁意求生意熱、但縁意熱生意求。) v3  
 是名比丘、  
 縁種種界生種種觸、 v4  
 (縁種種觸生種種想、 v4  
 縁種種想生種種欲、  
 縁種種欲生種種覺、 v5  
 縁種種覺生種種熱、) v5  
 縁種種熱生種種求。  
 非縁種種求生種種熱、 v6  
 (非縁種種熱生種種覺、 v6  
 非縁種種覺生種種欲、  
 非縁種種欲生種種想、  
 非縁種種想生種種觸、)  
 非縁種種觸生種種界。  
 但縁種種界生種種觸、  
 (縁種種觸生種種想、  
 縁種種想生種種欲、  
 縁種種欲生種種覺、  
 縁種種覺生種種熱、)  
 縁種種熱生種種求。  
 佛説此經已、諸比丘聞佛所説歡喜奉行。  
 如内六入處、外六入處亦如是説。

このことから、このサンスクリット断片はシャマタデーヴァの引用する  
 経文と同じように、冒頭にまず否定文が来る構造をしており、『雑阿含経』  
 455 経とは若干構成を異にしていたと考えられる。

また、recto 6 と verso 1 との間隔で対応部分が多いのは、recto 6 に  
 pūrvasūtravad vacya 「前の経のように説かれる」とあるように、サンスク  
 リット写本の方に繰り返し部分の省略があるからであろう。つまり、

縁眼觸生眼想、非縁眼想生眼觸、但縁眼觸生眼想。  
 縁眼想生眼欲、非縁眼欲生眼想、但縁眼想生眼欲。  
 縁眼欲生眼覺、非縁眼覺生眼欲、但縁眼欲生眼覺。  
 縁眼覺生眼熱、非縁眼熱生眼覺、但縁眼覺生眼熱。  
 縁眼熱生眼求、非縁眼求生眼熱、但縁眼熱生眼求。  
 如是耳鼻舌身。

の部分がサンスクリット写本では省略されていると考えられる。しかし、  
 「意」に関する記述は verso 1-3 に記述されているので、サンスクリット写  
 本でも省略はないと考えられる。すると、recto 6 と verso 1 との間に

意界縁生意觸、(非縁意觸生意界、但縁意界生意觸。  
 縁意觸生意想、非縁意想生意觸、但縁意觸生意想。  
 縁意想

の部分に対応するサンスクリット文があるはずだが、他の行に比べて開きが大きすぎる。さらに、 verso 1 と verso 2 の対応箇所の開きが他と比べて広いことも問題となる。これらも、サンスクリット写本と『雑阿含経』の間に相違があることを示す。

それでも、このようにして、『雑阿含経』455 経やシャマタデーヴァの引用する経文と比較することで、サンスクリット断片は以下のように一部復元できる。

recto

- 1 /// jñānānātvaṃ<sup>(1)</sup> pratītya sparśanānātvaṃ bhavati + + ///
- 2 /// vati<sup>(2)</sup> saṃjñānānātvaṃ pratītya chandanānātvaṃ bha<sup>(3)</sup> + ///
- 3 /// [tva]ṃ<sup>(4)</sup> pratītya paryeṣanānānātvaṃ bhavati | kiṃ ca dh.<sup>(5)</sup> ///
- 4 /// .. [tva]ṃ<sup>(6)</sup> pratītya saṃjñānānātvaṃ bhavati saṃjñānānā<sup>(7)</sup> ///
- 5 /// .. ridāghanānātvaṃ<sup>(8)</sup> pratītya paryeṣanānānā<sup>(9)</sup> ///
- 6 /// [tp]adyate<sup>(10)</sup> cakṣuḥsaṃsparśaḥ pūrvasūtravad [vacya] ///

- 1 ... 表象の種々性によって接触の種々性が生じる ...
- 2 ... 生じる。表象の種々性によって意欲の種々性が生じる。...
- 3 ... (種々) 性によって追求の種々性が生じる。そして、要素 ... 何か ...
- 4 ... (種々) 性によって表象の種々性が生じる。表象の種々性 ...
- 5 ... 熱望の種々性によって追求の種々性 ...
- 6 ... 眼による接触が生じる。前の経のように説かれる ...

verso

- 1 /// te<sup>(11)</sup> manaśchandaḥ na manaśchandaṃ pratītyotpadyate ///
- 2 /// [pra]tītyotpadyate manaḥparidāghaḥ na manaḥ[p].<sup>(12)</sup> ///
- 3 /// .. [pra]tītyotpadyate manaḥparyeṣanā | na ma<sup>(13)</sup> ///
- 4 /// tunānātvaṃ<sup>(14)</sup> pratītya sparśanānātvaṃ bhavati s.<sup>(15)</sup> ///
- 5 /// vati<sup>(16)</sup> saṃkalpanānātvaṃ pratītya paridāgha + ///
- 6 /// [ghaḥ]nānātvaṃ<sup>(17)</sup> bhavati na paridāghanān(ānātvaṃ) ///

- 1 ... 思考による意欲が生じる。思考による意欲によって ... が生じるのではない。...
- 2 ... によって思考による熱望が生じる。思考による熱望 ... ではない。
- 3 ... によって思考による追求が生じる。思考による ... ではない。
- 4 ... 要素の種々性によって接触の種々性が生じる。接触 ...
- 5 ... 生じる。志望の種々性によって熱望 ...
- 6 ... 熱望の種々性が生じる。熱望の種々性 ... ではない。...

(1) *Read saṃjñānānātvaṃ.*

(2) *Read bhavati.*

(3) *Read bhavati.*

(4) *Read nānātvaṃ.*

(5) *Read dhātu.*

(6) *Read nānātvaṃ.*

- (7) *Read samjñānānātvaṃ.*
- (8) *Read paridāghanānātvaṃ.*
- (9) *Read paryeṣanānānātvaṃ.*
- (10) *Read utpadyate.*
- (11) *Read utpadyate.*
- (12) *Read manaḥparidāghaṃ.*
- (13) *Read manaḥparyeṣanāṃ.*
- (14) *Read dhātunānātvaṃ*
- (15) *Read sparśanānātvaṃ.*
- (16) *Read bhavati.*
- (17) *Read paridāghanānātvaṃ.*

以上、インド仏教研究の最も基本的な部分でありながら、多くの部分が失われていたインド語テキストそのものの同定を行う際やインド語写本断片から再構成を行う時、漢訳仏典が大きな役割を果たす。発見されたインド語写本の内容が何であり、そのインド語写本が断片の場合は、その断片がテキスト全体に於いて占める位置がわかるからである。

#### 4

最後に、漢訳仏典の有用性の第4として「漢訳仏典訳出に関する記録からそのテキストのインドにおける成立年代の下限などの重要な情報が得られる」ことに関しても、『雑阿含経』には興味深い事実がある<sup>35</sup>。

まず、『雑阿含経』の漢訳年代は、唐代の『古今訳経図紀』巻3に「沙門求那跋陀羅……以宋文帝元嘉十二年来至楊都……至宋元嘉二十年……譯雜阿含經」<sup>36</sup>とあることから、従来は A.D. 435 年から 443 年の間とされていた<sup>37</sup>。

しかし、『出三蔵記集』巻十四の「求那跋陀羅伝」によると、求那跋陀羅が中国に到着したのが「元嘉十二年」つまり、435 年で、最初に「訳出」したのが『雑阿含経』であり、その後に『勝鬘経』を「訳出」したことが知られる<sup>38</sup>。

一方、『出三蔵記集』には慧観の『勝鬘経序』が収録されており、そこには『勝鬘経』が「元嘉十三年」つまり、436 年に訳されたとある<sup>39</sup>。この慧観は『勝鬘経』の訳出に際して筆を執った人物であることが先の『出三蔵記集』の「求那跋陀羅伝」から知られ、『勝鬘経』が 436 年に訳出されたという情報は最も信頼がおける。したがって、これらの記事による限り、『雑阿含経』の訳出は 435–436 年であると特定できる。かくて、『雑阿含経』のイ

<sup>35</sup>以下について詳細は、榎本文雄「『雑阿含経』の訳出と原典の由来」『石上善應教授古稀記念論文集・仏教文化の基調と展開』、山喜房佛書林、2001、pp.31–41 で論じた。

<sup>36</sup>『大正蔵』55、p.362ab。

<sup>37</sup>L. R. Lancaster, *The Korean Buddhist Canon: A Descriptive Catalogue*, Berkely 1979, p.230.

<sup>38</sup>「求那跋陀羅。……中天竺人也。……元嘉十二年至廣州……初住祇洹寺。……於祇洹寺集義學諸僧、譯出雜阿含經。東安寺出法鼓經。後於丹陽郡譯出勝鬘楞伽經。徒衆七百餘人。實雲傳譯。慧観執筆」(『大正蔵』55、p.105bc)

<sup>39</sup>『大正蔵』55、p.67b。

ンド語原典の成立年代の下限は一先ずこの年代となる。では、『雑阿含経』の原典の由来はどうであろうか。

6世紀末成立の『歴代三宝紀』に『雑阿含経』の原典の由来に関する現存最古の記事がある。

「雑阿含経五十卷 於瓦官寺譯。法顯齋來。見道慧宋齊録」(『大正蔵』49, p.91a)

ここで『雑阿含経』の原典は法顯が将来したものとされ、『歴代三宝紀』以後の経録はこれを踏襲する。法顯が将来した『雑阿含経』とは、『高僧法顯伝』の「師子國」の条で「法顯住此國二年。更求得彌沙塞律藏本。得長阿含雜阿含」<sup>40</sup>とあるように、法顯がスリランカから将来したものであるが、これら『彌沙塞律』『長阿含』と同じく「梵文未譯」として法顯在世中には翻訳されなかったものである<sup>41</sup>。したがって、『歴代三宝紀』のこの記事が正しければ、『雑阿含経』の原典はスリランカで伝承されていたものとなる<sup>42</sup>。先述のように、『雑阿含経』は説一切有部に属しているので、もしこの記事が真実を伝えていると、スリランカに説一切有部の典籍が存在したこととなり、大変興味深い。

ところが、この記事の「於瓦官寺譯。法顯齋來」の根拠が問題である。末尾に「見道慧宋齊録」とあるが、『宋齊録』は、既に『歴代三宝紀』の時代に欠本になっていたことを『歴代三宝紀』自身が明記している<sup>43</sup>点などから、この記事は『宋齊録』に基づくとは考えがたい。

また、6世紀初頭に編まれ、完本として現存する最古の経録である『出三蔵記集』の記録はこの『歴代三宝紀』の記事と相反する。そこでは、『雑阿含経』は、瓦官寺ではなく、祇洹寺で訳出されたとあり、原本の由来は記されていない<sup>44</sup>。一方、先に掲げた『高僧法顯伝』において『雑阿含』と共に法顯がスリランカから原典を将来したと記す『彌沙塞律』(Mahīśāsaka 化地部の律)<sup>45</sup>の場合、先に述べたように、「梵文未譯」として法顯在世中には翻訳されなかったものの、後になって、「彌沙塞律三十四卷 即釋法顯所得胡本」として仏駄什が「訳出」したと『出三蔵記集』には明記されている<sup>46</sup>。しかし、同じく「梵文未譯」として法顯在世中には翻訳されなかった

<sup>40</sup> 『大正蔵』51, p.865c.

<sup>41</sup> 『出三蔵記集』『大正蔵』55, p.12a.

<sup>42</sup> J. W. de Jong, "Fa-hsien and Buddhist Texts in Ceylon," *Journal of the Pali Text Society*, 9 (1985), pp.105-116 はこの『雑阿含経』原典スリランカ将来説をとる。

<sup>43</sup> 『大正蔵』49, p.127c.

<sup>44</sup> 『出三蔵記集』巻二の場合、『大正蔵』が底本とした高麗版には訳出場所の記録がないが、『大正蔵』の脚注に挙げる宋元明の三版には「宋元嘉中於瓦官寺譯出」とあり、『歴代三宝紀』の記事に近い。このように、『出三蔵記集』の宋元明版には、その高麗版には存在しない記事が含まれることが他にもある。このうち竺法護の訳出經典の場合については、高麗版の方が原典であって、宋元明版は原典とは認められないことが明らかにされている(河野訓「竺法護の經典訳出年等再考」『佛教文化』22巻(25号)、1989, pp.44-67)。この場合も、高麗版がオリジナルで、宋元明版は二次的な改変を蒙っていると看做す。この点は、『出三蔵記集』に依るところの大きい『高僧伝』(『大正蔵』50, p.344b)や『名僧伝抄』(『卍續藏經』134, p.10b)においても、『雑阿含経』の訳出は瓦官寺ではなく、祇洹寺と明記されていることから確認できる。

<sup>45</sup> 『大正蔵』22, pp.1ff. として現存する。

<sup>46</sup> 『大正蔵』55, p.12b.

法顕将来の『雑阿含』の「梵文」が後に訳出されたか否かについて、『出三蔵記集』は何も記さない。この事実は、『出三蔵記集』の時代には、求那跋陀羅が訳出に関した『雑阿含経』の原典は法顕将来の『雑阿含』であるとは看做されていなかったことを物語る。

このようにして、先の『歴代三宝紀』の「雑阿含経五十卷 於瓦官寺譯。法顕齋來。見道慧宋齊録」という記事は信頼性に欠けると考えられる。むしろ、『雑阿含経』の原典は、法顕が将来したものではなく、訳者の求那跋陀羅自身が将来したものと考えた方が、内容を含め諸状況と符合する<sup>47</sup>。

以上、漢訳仏典の有用性を4点にわたって『雑阿含経』に関して考察した。

---

#### Abbreviation

大谷目録 = 『影印北京版西藏大藏經 - 大谷大學圖書館藏 - 總目録 附索引』、鈴木学術財団、1962。

『大正蔵』 = 高楠順次郎・渡邊海旭編『大正新脩大藏經』、1924ff.

東北目録 = 宇井伯寿他『西藏大藏經總目録 東北帝国大學藏版』、1934。

Harrison 2002 = P. Harrison, “Another Addition to the An Shigao Corpus?: Preliminary Notes on an Early Chinese *Samyuktāgama* Translation,” 『櫻部建博士喜寿記念論集・初期仏教からアビダルマへ』、平楽寺書店、2002年、pp.1–32.

Hartmann and Wille 1992 = J.-U. Hartmann and K. Wille, “Die nord-turkistanischen Sanskrit-Handschriften der Sammlung Hoernle,” in: J.-U. Hartmann et al., *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen*, 2 (Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 4), Göttingen, pp.9–63.

Śag = F. Enomoto, “Śarīrārthagāthā of the *Yogācārabhūmi*,” in: F. Enomoto et al., *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen*, 1 (Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 2), Göttingen 1989, pp.17–35.

SHT = E. Waldschmidt et al., *Sanskrihandschriften aus den Turfan-funden* (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, 10), 1ff., Wiesbaden, Stuttgart, 1965ff.

SN = *Samyutta-Nikāya*, 5 vols., ed. L. Feer, London 1884–1898.

---

<sup>47</sup> なお、この場合は法顕将来の『雑阿含』は漢訳されなかったこととなるが、その理由として、最近、長崎法潤教授は、法顕将来の『雑阿含』はパーリ語の *Samyutta-Nikāya* であったため、パーリ語を理解する適切な訳出者が見出せなかったと推測された。長崎法潤「雑阿含経解題」 in: 長崎法潤・加治洋一『雑阿含経 I』(新国訳大藏経、阿含部4)、大蔵出版社、2004、pp.5–63 (esp. pp.46–48)。

